

施設保育士たちはどのように子どもと関わってきたのか

— 本土復帰以降の沖縄における養護問題と養護実践 —

How Nursery Teachers Have Dealt with Children in Their Care

— Nursery Issues and Practice of Care in Okinawa Subsequent to Returning to the Mainland —

岩崎美智子（東京家政大学児童学科）

Michiko IWASAKI (Tokyo Kasei University)

要 旨

沖縄の児童養護施設で働く保育士たちの養護実践を、本土復帰以降に焦点をあてて、当時の社会的背景や福祉施策、養護問題をふりかえりながら考察した。彼女らが語った「印象的な出来事」は、①養護実践上の悩みや困難、②子どもの不幸、③優れた先輩からの学びや仲間との団結であった。また、「苦しかったこと」としては、①激しい子どもと関わる難しさ、②不条理に対する無力感、③自分自身の能力不足があげられた。それらは、他者との関わり、他者に対する哀惜、他者からの学びと協働であり、「共苦」の経験と、保育士が有すべき専門性に対する問いかけであった。施設保育士たちが大切にしていた価値は、他者理解と他者との関係性である。つまり、彼女らのアイデンティティは、何かを成し遂げること（能力）や、何かの一員であること（所属）ではなく、人との関わり（関係）、すなわち相互行為のなかにあった。

Abstract

We focused on the work of nursery teachers working in children's home in Okinawa, primarily subsequent to their return to the mainland. Some of the memorable things shared by the nursery teachers were: 1) concerns and problems related to the care they gave, 2) serious problems with the children themselves such as mental problems or suicide, 3) things they learned from outstanding senior associates, and solidarity with their co-workers. Things they termed extremely difficult and painful were: the difficulty of working with violent or self-destructive children, 2) a feeling of helplessness in the face of unreasonable circumstances, and 3) perceived insufficient ability. To summarize, the experience was one of compassion, of cooperation with and learning from others, and an inquiry into the specialized nature of being a nursery teacher. From this we can understand that the values they held dear were about their relationships with others.

キーワード：沖縄、児童養護施設、施設保育士、語り、関係性

Key words : Okinawa, Children's Home, Nursery Teacher, Narrative, in Relation

はじめに

日本の児童福祉の歴史をふり返ると、児童福祉施設が果たしてきた役割の大きさが理解される。そのなかでも児童養護施設は、戦前には孤児院と呼ばれ、戦後児童福祉法の成立によって養護施設として位置づけられた代表的な児童福祉施設である。1997年の児童福祉法改正によって児童養護施設と名称を変え、その目的や機能に多少の変更はあるものの、一貫して家庭環境から生じる原因によって社会的養護が必要になった子どものための養育の場であった。

社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会は、2011年7月に「社会的養護の課題と将来像」を提示し、児童養護施設の小規模化、里親委託率の引き上げ等の目標を設定した。半世紀も前から欧米諸国の動向は里親や養子縁組といった家庭的養護が主流であったが、日本もやっと家庭的養護を推進する動きが顕著になってきた。しかし、現在でもおよそ3万人の子どもが児童養護施設で生活している現状を考えれば、児童養護施設の存在意義はけっして小さなものではない。近年は社会的養護への関心が以前より高まってきているが、それでも施設で暮らす子どもたちの生活や職員の

養護・保育実践への理解は充分とはいえないだろう。

児童養護の当事者である子ども自身が施設生活や自らの思いを語り出版物やメディアを通して社会に向けて発信できるようになったのは、そう古いことではない⁽¹⁾。子どもたちは、ニーズの帰属主体であり、児童養護施設で養護を受けるという立場からいえば養護実践の対象（客体）でもある。実践を受け取る立場の人間が何を思い、どのように考えているかを知ることが、社会福祉実践である対人援助に不可欠なテーマであるが、対象者であり「子ども」という発言の場を持ちにくい立場であるため、従来は自己主張や発表の機会がほとんどなかった。それが、近年では当事者の語りによって、児童福祉関係者だけでなく、児童福祉と無関係な人びとも、施設の実態や子どもたちの状況や心情を知ることができるようになったという点は前進である。いっぽうで、養護実践の主体である職員についてはどうか。児童養護を担う施設職員の実践報告や労働条件、専門性に関する調査・研究は一部の専門誌等の文献で発表され検討・議論されているが⁽²⁾、実践者が自身の内面を語った書物や論文は、管見の限りではほとんど見当たらない。児童指導員や保育士は、子どもと毎日過ごしながらか、世話をし、ときに喜怒哀

楽を分かち合いながら生活支援をするという、子どものもっとも近いところにいるおとなたちであり、子どもへの影響力の大きさを考えるならば、彼ら／彼女らの思いや意見を知ることが児童養護実践においても重要な課題なのではないだろうか。そう考えれば、この種の研究があまりなされていないのは不思議でさえある。そこで、2009年に筆者らは、長年児童養護施設で働いた元保育士たちに詳細な聞き取り調査を実施して保育士たちの生活体験や意識・心情を理解しようと試みたが⁽³⁾、本論文はその延長線上にある。沖縄県の児童養護施設で働く保育士を対象としたのは、以下の理由による。敗戦後米軍占領下にあった沖縄県は、児童福祉制度も本土と異なる歴史的背景をもっているが、現在は失業率が全国平均を大きく上回っており、多数存在する米軍基地やひとり親世帯の割合の高さなど、子育て・子育ての経済的・社会的条件が恵まれているとは言いがたい状況にある。しかし、いっぽうで、里親委託率は全国有数の高さを誇り、元保育士たちの語りからは子どもに対する深い思いと養護実践への意志が感じられた。現在児童養護施設で働いている保育士たちは、なぜ保育士になろうとし、どのように子どもと関わろうとしたのだろうか。養護実践という仕事の一端、特に印象的な出来事や苦しかったことについて語ってもらうことによって、保育士たちの人間像を描き出すことが本稿の目的である。

1. 研究方法と対象

調査方法…2011年11月に、1対1の半構造化インタビューを実施

今回対象とする人びとは、長年沖縄県内で、おもに児童養護施設で保育士として勤務してきた女性たち9人（平均年齢56.9歳）である。彼女らは、ほとんどが短大等卒業後に保育士となって40年近いキャリアがあり、かつ公務員であるため、児童養護施設だけでなく、障害児施設や児童自立支援施設、児童相談所一時保護所や福祉事務所、役所の事務職に異動になった経験ももつ。ひとりを除いて全員が現在も児童福祉現場で保育の仕事に従事しており、定年間近な人では管理職としての役割も果たしている。

彼女らが、短期大学や専門学校を卒業して初めて県内外の保育所や児童福祉施設等に保育士として就職したのは、1970年代から1980年代初頭である。沖縄の本土復帰は1972（昭和47）年5月15日であるから、復帰前の就職が2人であり、あとの7人は復帰から10年以内に職に就いている。

つまり、本稿で対象にするのは、1970年から2011

年までのおよそ40年間にわたって沖縄県の児童養護施設で働いた保育士たちの養護実践ということになる。

2. 職業選択——なぜ施設保育士になろうとしたのか

筆者らは、以前、保育所保育士だった女性たち（平均年齢76.90歳の計31人）を対象に詳細な聞き取り調査を行なって、職業選択の理由を問うたことがある。その調査からは、①自身の職業や人生に明確な意思を持つ「自己実現型」、②社会状況や職場での出会いなど、きっかけは異なるが保育の仕事に理想や目標を見出す「価値追求型」、③他者からの勧めや生家、婚家が保育所だったことから保育の道に進んだ「生活先行型」、④現状に反対したり、現実逃避という側面を持つ消極的な選択である「セカンドチョイス型」の4類型を抽出した⁽⁴⁾。平均年齢が77歳近くである調査対象者たちが職業を選択した時代は1950（昭和25）年前後であるため、当時の女性が就ける職業はかなり限られていた。「自己実現型」や「価値追求型」がいなかったわけではないが、「自己実現型」に分類された女性は1人だけで、「価値追求型」は3人だった。4類型のなかでは「生活先行型」がもっとも多く、ほとんどの女性たちは「なりゆき」や「他人から勧められ」て保育者になったのだった。そのように確たる動機はなかったとしても、彼女たちは定年まで、あるいは70代、80代になるまで保育の仕事が続けていたのである。

かつての調査対象者と今回の対象者たちとは、およそ20歳（年）もの年齢の開きがあり、加えて、同じ保育士という職業でも「保育所保育士」と「施設保育士」という相違があり、対象としている子どもや職務内容が異なるため、単純な比較はできないが、一定の傾向をみていくことにしよう。今回の対象者たちの職業選択の動機や影響を与えた人がいたかどうかを尋ねると、もっとも多かったのが、身近な職業人としてのおとなの言動や仕事ぶり、姿勢をみて進路を決めたというものだった。（複数回答あり。計6人）内訳は、「小学校の先生」（2人）、「教会の牧師」（2人）、「教員であった父母」（1人）、「保育士だった姉」（1人）である。つづいて、職業人としてではないが、そのおとなの生き方や価値観に共鳴して、人間相手の仕事を選んだというものだった。（計2人）「子ども好きだった父の生き方」（1人）「いのちを何よりも大切に考える母の価値観、生き方」など（1人）である。残る2人は、これからは生きていくのに資格が必要だという父親や母親の助言にしたがって職業を選択した。いわば「実利的動機」であり、先の4類型では「生活先行型」に相

当する。また、障がいを持つきょうだいの存在が保育という職業につながったというケースも1人あった。やむを得ず、あるいは、他のことから逃れるためにという理由をあげた人はいなかった。これらをまとめるならば、「ケアする人」、「教える人」という「ロールモデルの影響」が8人、「生活手段の取得」が2人、「家庭でのケア体験（きょうだいへのケア）がきっかけ」が1人であったと言い換えることもできる。ロールモデルに憧れたり彼ら／彼女らから学んだことによって、保育の仕事に価値を見出したという対象者たちの自発性や、仕事に理想・目標をおくといった点が特徴的である。

短大のとき、朝、通学バスを待ってたら、障害者の方がバス停で転んだんですよ。目が見えなかったのかよくわかりませんが、そこまで覚えてない…。とにかく障害者の方が目の前で転んだんです。でも誰も助けなかったんですね。そのとき、近くのバス乗り場でぼんやりバスが来ないかなって待ってる父が、パーッと出て行って、ふだんはあんなことしないんですけど、その方を起こしてちょっと介抱してあげたんです。保育者になろうと思ったのは、弟をおぶって太鼓叩いて子どもたちを進行させた母（幼稚園の先生）を見てたからだと思うんですが、施設に勤めようと思ったのは、小学校や盲学校の教師だった父の影響だと思います。（Aさん）

わたし、ちょっと早くて、4、5歳のころから教会の日曜学校に行っていました。クリスチャンではないんですけど。沖縄は何かこう日曜学校に行く雰囲気があって、おうちの上のほうにある教会にずっと通ってました。きょうだいは全然行かなかったんですけど、わたしは中学2年で部活動をやって（教会に行くのを）やめるまで、ずっと行ってました。小学生のころ教会でボランティアをしていて、年に3～4回肢体不自由児施設に絵本の読み聞かせに行っていたんです。それがたぶんわたしの根底にはあって、保育所じゃなくて施設で働きたいと、漠然と思ってました。具体的に進路を決めたのは国立大学の心理学科に落ちたというのがきっかけでしたけど、意識の中にはたぶんあったと思います。聖書を読むのがけっこう好きでした。教会で牧師先生から人に奉仕することを学んだと思います。（Bさん）

子どものよいところを認め受け容れる「受容」や、弱い立場の人をさりげなく守ろうとする「共感」、他者への「奉仕・貢献」といったおとなの行為を美質と

とらえた対象者たちの子ども時代の感受性が理解できる。また、限定的な少数の対象者からの一般化はできないものの、教会の牧師の影響があげられているのは、クリスチャンが多い沖縄県の特徴を示す一端かもしれない⁽⁵⁾。いずれにしても、対象者たちの職業選択には、自身の人生や職業に明確な意思を持つ「自己実現型」や福祉や保育の仕事を通じての理想をめざそうという「価値追求型」の姿勢が認められた。

3. 養護実践において心がけたこと

子どもの保育において心がけたことを訊いた。ひとつめは、「自分を見失わない」「子どもに必要なことを見抜く目を養う」といった回答で、養護実践者としての姿勢や態度を示しており、自分自身が専門職としての専門性の向上や力量形成をめざしたということである。第2として、子どもの「安全」や「コミュニケーションをとること」を心がけた、「ひとを区別しない」、「自然体で接した」、「自分が間違ったときは、ちゃんと謝った」といった内容であった。これらは、対子どもの関わり方を言っており、子どもに対して実践者としてどのように接したか、関わろうとしたかを示している。3番目は、「将来の自立のために、生活習慣を身につけさせたい」、「ホッとできるような居場所づくり」を心がけたということである。これらは、子どもにとっての目標や環境を指している。

施設の子どもたちが必要としているものを見抜けるのかどうかという「自分の目」というんですかね。それが非常に気になったので…。ぼんとして一時保護所に子どもが来ても、この子の何が育っていて何がまだなのかが見えない。だから、この子が必要とするもの、何を教えてあげたらいいのか、何を助けてあげたらいいのかを見抜く目をどうやって身につけようかなというのに、結構とらわれていたような気がします。だから、近くの小学校の運動会なり学習発表会なりを見に行くと、その発表の場を見るんじゃなくて、その裏側に行くと子どもたちが出番待ちのところではガチャガチャけんかしている様子だとか、仲よく遊んでいる様子だとか、そういうのを結構見に行きました、休みの日に。やっぱり怖かったですよね。ちょっとした異常な部分を見せるのを、これを異常とするか正常とするかという決定してしまうものがあるから、もう少し自分の中にいろんな情報があれば、ゆがんだ方向に子どもを導かないですむのかなという思いもあったので、そこにすごくとらわれていたような気がします。（Cさん）

図1 施設保育士が勤務した時代の社会的背景と福祉施策、養護問題

西暦 元号	1970 昭和 45	1975 昭和 50	1980 昭和 55	1985 昭和 60	1990 平成 2	1995 平成 7	2000 平成 12	2005 平成 17	2010 平成 22
社会の 出来事 (日本)	オイルショック (1973) 大阪 万国博覧会 (1970)				平成と改元 (1989) バブル崩壊 (1990)	阪神淡路大震災 (1995)	サッカーワールドカップ 日韓大会 (2002)		東日本 大震災 (2011) 福島第一 原発事故 (2011)
社会の 出来事 (沖縄)		沖縄海洋博 (1975) 沖縄本土復帰 (1972) コザ騒動 (1970)					沖縄サミット (2000) 沖縄県民総決起大会 (1995) 「ちゅらさん」沖縄プーム (2001)	米軍ヘリ墜落 (2004)	
社会問題	コインロッカーベイビー (1973)		サラ金社会問題化 (1983 ごろ) いじめ増加・ファミコンブーム (1985 ごろ) 校内・家庭内暴力急増 (1980 ごろ)		1.57 ショック (1990)	ホームレス急増 (1998) 不況・リストラによる 中高年自殺急増 (1999) 「援助交際」(1996)		熊本市 「赤ちゃんポスト」 設置 (2007) タイガーマスク 現象 (2010 ~ 2011 ごろ)	
児童福祉 関連施策	特別育成費 (1973)	国際児童年 (1979)				児童福祉法改正 (1997) 児童虐待防止法 (2000) エンゼルプラン (1994) 子どもの権利条約批准 (1994)	DV 防止法 (2001) 専門里親・親族里親 (2002)		児童福祉 施設最低 基準の改定 (2011)
沖縄の 養護問題		第 1 期 1970 年代 非行への対応		第 2 期 1980 年代 親の「就労」による 施設入所		第 3 期 1990 年代 新たな貧困		第 4 期 2000 年代 児童虐待の増加	第 5 期 現代 養護問題の 拡大

* 中村政則・森武磨編 (2012) を参考にして、筆者が作成した

最初（施設に）入ったころは若かったので、子どもたちになめられたらいけないというか、そのへんすごい気張ってたところがあるんですけど、ある程度いくと自然体で子どもたちと接したいっていう気持ちがあって…。それと、どうしても施設って集団生活になるので、学校でも集団生活、戻ってきても集団生活。その中で、できたらほっとする場所に施設がなるようなかたちでいたいなっていうのを意識して。結局卒業後は自立しないといけないという厳しい現実があるので、自立を促しながらも、やっぱり居場所作りというか、ほっとできるような場所でありたいということは心がけていたというふうに思います。(D さん)

以上を要約すれば、①保育専門職としての専門性向上や力量形成、②子どもとの関わり方、③子どもにとっての目標や望ましい環境の実現ということになる。

4. 社会的背景と福祉施策、養護問題の変遷、養護実践——1970 年～2011 年

保育士たちが働いていた 1970 年代～2011 年ほどのような時代だったのだろうか。まず、およそ 40 年間のおもな社会的出来事（日本全体と沖縄）と社会問題を

とりあげて、この時代をふりかえってみよう。加えて、そのころの福祉施策なかでも児童福祉と社会的養護に関するものを中心に確認し、保育士たちが子どもたちと過ごした時代の養護問題を概観する⁽⁶⁾。そして、保育士たちの語りから、職業生活のなかでの「印象的な出来事」や「苦しかったこと」をとりあげて、養護実践について考察していくことにする。(図 1 参照)

4-1 第 1 期 (1970 年代) —— 非行への対応

【社会的背景】

1970 年代は、戦後日本社会のひとつの大きな転換点である。敗戦後復興をめざして 1955 年ごろから続いた高度経済成長が 1973 年のオイルショックを境に終わりを告げ、低成長時代へ突入する。高度経済成長は、人びとの生活に豊かさをもたらしたものの、農村の過疎や都市の人口流入、公害といった負の遺産をも生んだ。1970 年代のおもな社会的出来事をあげると、1970 年大阪万国博覧会、1976 年ロッキード事件などがある。

それでは、沖縄県はどうか。1970 年代といえば、まず 1970 年のコザ騒動、1972 年の本土復帰、75 年の沖縄海洋博が挙げられるだろう。

【福祉施策】

福祉国家政策が進められることとなり、1973 年は

「福祉元年」と呼ばれたが、その年に政府は方向転換をする。児童福祉関連では、1970年に全国社会福祉協議会養護施設協議会から実践と研究をつなぐ季刊誌『児童養護』が創刊され、1973年に「特別育成費」によって養護施設で暮らす子どもの高校進学が可能になった。1979年は、「国際児童年」であった。

【養護問題】

1972（昭和47）年度の相談所の総受付件数は、1,333件で、そのうち「非行」とまとめられる教護相談と触法行為相談を合わせた件数が中央、コザ両相談所合計でもっとも多く、601件（45.1%）を占めている。特に、コザの数字に注目すると、この相談だけで全体の6割という高率である。教護、触法行為相談のつぎが、精神薄弱相談14.1%（188件）、養護相談が10.9%（145件）とこれにつづく。

1969年から1970年にかけて、教護相談の中で圧倒的に多いのが「シンナー遊び」であった。山内は、当時ベトナム戦争に駆り出される米兵との小競り合いが絶えず、コザ騒動（1970年12月）など不安定な社会情勢が子どもたちの心を荒廃させ、現実逃避の手段としてシンナーが使われたのではないかと指摘している⁽⁷⁾。また、1976年ごろから養護相談が急速に増加したことに対して、当時の児童相談所長は、1973年のオイルショック、75年の海洋博覧会の後遺症ともいべき企業の倒産等が1976年ごろから相次ぎ、その結果親の失業、離婚、蒸発等のため養護相談が増加したという⁽⁸⁾。

保育士たちが当時をふり返って話した「印象的な出来事」としては、1970年代半ばの性非行、シンナー、無断外泊、「苦しかったこと」としては自死した卒園生のことがあげられた⁽⁹⁾。また、同じく1970年代の後半に、劣悪な労働条件に疲弊しきった同期の保育士がやめたことをきっかけにして労働闘争に参加した苦闘の日々が語られた。

非行系の強い子どもたちを指導するのは大変でしたね。性的な問題もあったし。あるとき女の子と男の子がいないから、どこいったんだろうと思ったら、近くの林とか体育館の中とか…。やっぱりわたしたちが気づかない面もあったりして。それはもう、とてもショックなことだし。大変でしたね。

ある女の子を探す時には、自分たちが行ったこともない売春の町に探しに行くわけですよ。その頃わたしは26、27歳だったと思いますね。「あそこにいるんじゃないか」という情報があって。中にいるっ

てことが分かれば、警察が踏み込めるから、みたいな話で。みんなで行くんですよ、組んで。その時に、上司に「一番派手な服着て来い」と言われて…。「ちゃんと君たちは守る」、「何メートルおきについて行くから、自分たちが見れない所や入れない所を見てほしい」と言うんですよ。どうしたらいいんだろうと思ってね。

そのあと、また薬物。シンナーだとか。で、墓地も探しに行ったりしましたよ、夜中に。まだお骨が納められてない建築途中のお墓があるんです。その中で寝泊まりする子もいたりして。そこに寝込みを襲うわけですよ、寝てるんじゃないかと。だいたいそこらへんにいるらしいっていう情報を掴んでから行くんですけど。1970年代終わりから80年代前半くらい？独身でしたし、怖かったですよ。だから、「わたしはここから出ません。行ってください。車で待ってます」と感じて…。団地の中でも、何時でも子どもを受け入れる家庭があったりして。親は寝てるんですけど、その子どもが「コンコン」といえば、もうパッとすぐドアを（開ける）。で、わたしたちだとわかったらびっくりするんですけど、「とにかく入るよ」と感じて入って、連れ帰ったこともありますね。（Eさん）

施設に就職した年でしたか、とても気にかけている子どもがいて、男の子でしたけど、その子が退所して2年後（1970年代後半ごろ）に自殺したんです。この子のほうがわりとこっちを慕ってくれて、何かにつけていろいろ話しかけてくれた子だったんですけど。中学校を卒業して本土就職をさせたんですけど、2年後に沖縄に帰ってきたときに、はい…。その前に施設にも来ていたんですけど、その子が自殺だっということが今とても悔やまれるというか…。もうその子のことが一番…。寂しかったんじゃないですかね。この子、天涯孤独みたいな子でしたから。お兄ちゃんいたんですけどね。他に頼れる人もいなくて、お兄ちゃんももう結婚していたもんですから。だから亡くなる何時間前に来て話したんですけど、その子のことが今でも…。あのときにああ言えばよかったって、とても今でも心に残ることが、顔とか何かやっぱり…。

日々見ていて、こっちはもっといろんなことを話したり、いろんなことを教えてあげたいと思っても、ほとんどは中学校を卒業したらここを出ないといけません、昔は。沖縄はそういう会社とかもないから、寮がちゃんとあってというところはもう本土就職ですよ。そういうところにみんな送り出しする

んですけど、見ていても本当に子どもで、生活面もまだちゃんとできないのに、結局卒業したらみんな出さないといけない。まだ子どもなのに、この子たちまだ幼いのにつて…。高校に入れないし、本人たちも学力なかったもんですから。だからそれが見つかったです。(沖縄に)戻ってきて転々として、今はどこに行っているかわからないって感じの子が多いですね。やっぱりもたなかったですね、まだ心も弱いし。そこでちゃんと話を聞いてくれる人ってもういないし。中3でまだ子どもですよ、高校進学率が低かったし。1985(昭和60)年ぐらいまではそういう就職ってかたちでした。(Fさん)

4-2 第2期(1980年代)

— 親の「就労」による施設入所

【社会的背景】

1980年代は、土地や株の高騰による「バブル景気」の時代であった。80年ごろは校内暴力や家庭内暴力が急増したといわれ、1983年にはサラ金が社会問題化し、85年にはファミコンブームが起こって「いじめ」が小中学校で増加した。1989年に「平成」と改元され、国連で子どもの権利条約が採択された。

【福祉施策】

1987年に社会福祉士・介護福祉士法が成立し、1989年にはゴールドプランが出された。

【養護問題】

1980年当時の状況をみてみよう。1972年コザ児童相談所が分離独立したため、中部地区(沖縄市、宜野湾市、嘉手納町など)と北部地区(名護市、本部町など)は中央児童相談所の管轄外となった。そこで、本資料は、中央児童相談所のみ統計になる。1979(昭和54)年度の総相談件数は、1,552件であり、そのうち最多は、心身障害の相談で803件(51.7%)である。つづいて、「適正」、「しつけ」、「性向」などを含む健全育成相談が263件(17.0%)、養護相談は224件(14.4%)、非行相談は169件(10.9%)であった。1979年に養護学校が義務化されたため、障害を持つ就学前の子どもたちの相談に重きを置かれ、早期発見・早期治療という観点からさまざまな事業が開始された。そのため、心身障害相談や健全育成相談が著しく増加したと分析されている⁽¹⁰⁾。

養護相談227件(前年度未処理の3件を含んだ統計)のうち1979年度でもっとも多かったのが父母の家出47件(うち母親の家出は41件、両親は4件)である。つづいて、精神障害(疾病)を除いた父母の傷

病が36件、就労が22件、精神障害が19件、心身障害14件がこれに続く。児童相談所の記述では、「就労を理由とした相談が近年目立って増加している。」とされている⁽¹¹⁾。1970年代半ばからの失業率上昇からもわかるように、親の経済的困難が養護問題を生んでいることが理解される。

「印象的な出来事」として語られたことをあげる。

ある男の子がシンナーで亡くなって、連絡があった…。警察はすぐ隣にあったので、そこ行って…。警察の冷蔵庫に入っているし、亡くなったら入れるんです。そうしたら、すごい、洋服も…。丸裸で入れるんです、こんな金の檻の中に。で、こんなふうな扱いするのは初めて見て…。この子は施設にいるときも、あまりいい思い出ではない子ではあるけども、元同僚と2人で着ける洋服を、肌着とかを買いに行ったりしてね。お昼休み時間とかにやったんだけど。この子のそういうことが忘れられないね。その子は、10いくつかの子で、わたしが本庁行ったときに(児童自立支援施設に)行ったらしい。

施設で働いていた時は、1カ月ぐらい睡眠不足だからボーっとしてずっとこうしているという感じの、それくらいなの。でもこれが苦しいとは思ったことない。これに対してつらいなと思ったのは、本庁に行って、例えばこういうふうなこの子どもの洋服買いに行こうとかお葬式に行こうとかいうふうなときに、本庁の職員からすると、わたしがこうやってちょっと時間を取って行ったりするのにとても不満みたいで、ぐちぐち何か表情がよくなかったんです。だからそれがわたしには納得はできなかったけれど…。本庁の方たちとかそういう人たちは、こういうふうな仕事(子どもの養育)をしているわけじゃないから、理解ができないんだろうなとは思ったけれども…。それにしても何でなんだろうというふうに思ったことはありました。(Gさん)

4-3 第3期(1990年代)新たな貧困

【社会的背景】

1990年には東西ドイツが統一されたが、日本では、1995年1月には阪神淡路大震災、3月には地下鉄サリン事件がおこる。不良債権問題やいわゆる「援助交際」が取り上げられたのは1996年であり、1998年にはホームレスが急増し不況やリストラによる中高年の自殺が急増したといわれる。

沖縄では、95年「平和の礎」序幕、米兵による少女暴行事件がおこり基地問題がクローズアップされ

た。96年基地縮小・地位協定見直しの賛否を問う全国初の県民投票が実施された。

【福祉施策】

1990年に日本では「1.57ショック」という言葉が広まり、少子化が認識されるようになった。同年、福祉関係8法が改正された。1994年には日本政府が子どもの権利条約を批准し、エンゼルプランが策定された。1997年には児童福祉法が50年ぶりに大改正された。

【養護問題】

1990年度の状況はどうか。平成2年度版の『業務概要』は、中央児童相談所とコザ児童相談所の統計が両方載っている。1989（平成元）年度の総件数3,405件のうち、種別の多いものから、精神発達遅滞相談、育成相談、身体障害相談、養護相談、非行相談の順である。これは、全国統計（昭和63年度）でも同様の傾向がみられる。しかし、細かくみていくと、沖縄のほうが多いのは、身体障害相談（全国16.1%、沖縄20.1%、全国比+4.0%）、養護相談（全国10.0%、沖縄12.8%、全国比+2.8%）、非行相談（全国8.6%、沖縄11.8%、全国比+3.2%）であり、逆に精神発達遅滞相談は低い傾向にある（全国39.5%、沖縄30.7%、全国比-8.8%）。なかでも養護相談と非行相談に着目すると、沖縄の養護相談は437件（12.8%）、非行相談は402件（11.8%）であった。

沖縄県の失業率の推移をみると、1998（平成10）年に7.7%と急上昇している⁽¹²⁾。その後は2010年ごろまで7~8%台を推移したことから判断すると、90年代後半から雇用状況が急激に悪化し、経済的困窮による養護問題が増加したものと考えられる。

ショックだったのは、この施設に入ったんだけど、なかなかじまないうちの子がいたんです。結局しよっちゅう無断外泊して。捜しては戻してくるんだけど、出て行って…。繁華街、多分友達同士で遊んでいたんでしょうね。やっぱり集団に慣れないというのかそんな…。あまり話したくないんですけど、この子が結局遺体で見つかったんです。何が原因だったかというシンナーだったみたいです。それで、子どもの育て方、園で生活させるためには、とどめさせるにはどうしたらいいのかなというのは話し合いました。しよっちゅうこの子を探すためにおうちにも行ったり家庭訪問したりとかいろいろやっている時期の中での、こんなして亡くなっていたよというのを聞いたもんですから、ちょっとショックを受けました。（Hさん）

4-4 第4期（2000年代）——児童虐待の増加

【社会的背景】

2001年は9.11同時多発テロがおこった。2002年にはサッカーワールドカップ日韓大会が開催され、2003年にイラク戦争が勃発した。郵政民営化法が成立し、小泉内閣によって構造改革が進められた。2008年のリーマン・ショックを契機として世界的不況となった。そして、2009年8月の衆院選で民主党が大勝し政権交代した。

沖縄では、2000年沖縄サミット（主要国首脳会議）が開催され、首里城跡などが世界遺産登録された。2001年にはNHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」が人気を博し、沖縄ブームがおこった。2004年8月普天間基地の米軍ヘリが沖縄国際大学に墜落・炎上した。

【福祉施策】

2000年に児童虐待防止法、2001年DV防止法が成立する。2002年専門里親・親族里親制度が発足した。

【養護問題】

2000年度の状況はどうか。1999（平成11）年度の総件数5,062件のうち、種別をみると、多いものから、障害相談、その他、育成相談、養護相談、非行相談の順である。「その他」を除いて沖縄のほうが多いのは、養護相談（全国12.9%、沖縄15.7%、全国比+2.8%）、非行相談（全国4.9%、沖縄9.4%、全国比+4.5%）であり、逆に障害相談は大幅に低く、（全国52.8%、沖縄35.3%、全国比-17.5%）育成相談も低い傾向にある（全国19.9%、沖縄17.9%、全国比-2.0%）。

なかでも養護相談に着目すると、1999（平成11）年度の養護相談は、796件であり、前年度の566件からおよそ1.4倍に増えた。養護相談のなかの児童虐待は、同年度は234件であり、これも前年度の115件と比べると2倍増である。虐待種別をみると、1999（平成11）年度沖縄の虐待相談件数は、多いものから「ネグレクト」122件（52.1%）、「身体的虐待」76件（32.5%）、「性的虐待」23件（9.8%）「心理的虐待」は13件（5.6%）であった。全国の傾向をみると、もっとも多いのは「身体的虐待」51.3%で、「ネグレクト」29.6%、「心理的虐待」が14.0%、「性的虐待」が5.1%の順である。つまり、沖縄は、全国平均と比べて「ネグレクト」の割合が大変高く、「性的虐待」も2倍近いことが理解される⁽¹³⁾。

当時の「印象的な出来事」としての語りである。

だんだん（被）虐待児の入所が増える中で、普通

に話していると思ったら、その子がキレて、わたしをたたいてくるんです。わたしは普通に話しているつもりだけど、彼にするともう言葉が入らないというか、殴ってきて…。青くなるぐらいたたかれて。わたしの言った言葉に何か彼がムカつく言葉があったようで…。わたしも後で「ごめんね、その言葉。あなたがそんなに怒ると思わなくて言ったのよ」と言うと、「先生、ごめんね」と、そういう感じの優しい子なんですけど、カッとなったみたいで、びっくりしました。2001（平成13）年あたりから被虐待児の入所が急増して、（子どもが）殴りかかってくる状態で、どうしようもなくて、職員みんながこんなして非常ベルを首からかけて仕事をしていました。職員も守らないといけないし、子どもも守らないといけない。これは、本当にいやでした。でも、とても怖かったですし、命がけで仕事をしていた時代です。（Iさん）

4-5 第5期（現在）—— 養護問題の拡大

【社会的背景】

2011年東日本大震災、福島第一原発事故

【福祉施策】

2011年7月に社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会が「社会的養護の課題と将来像」を提示。児童福祉施設最低基準が改定された。

【養護問題】

2010年度の状況はどうか。2009（平成21）年度の総件数3,819件のうち、種別をみると、多いものから、養護相談、障害相談、非行相談、育成相談、その他の順である。細かくみていくと、「その他」を除いて沖縄のほうが多いのは、養護相談（全国23.3%、沖縄51.4%、全国比+28.1%）、非行相談（全国4.8%、沖縄12.5%、全国比+7.7%）であり、逆に障害相談は大幅に低く、（全国49.9%、沖縄25.9%、全国比-24.0%）育成相談も低い傾向にある（全国15.2%、沖縄6.3%、全国比-8.9%）。

なかでも養護相談に着目すると、2009（平成21）年度の養護相談受付件数は、1962件であり、前年度の1,840件からおおよそ112件増えた。

児童虐待の状況をみると、合計435件（全国16,343件）であり、身体的虐待200件（46.0%、全国38.3%）、ネグレクト140件（32.2%、全国37.3%）、心理的虐待76件（17.5%、全国21.3%）、性的虐待19件（4.4%、全国3.1%）の順である。いままでネグレクトの割合が最も多かった沖縄だが、身体的虐待が増加し、全国

の傾向に近づきつつある。

2008年実施の調査によると、沖縄県児童養護施設入所児の64%が被虐待児であり、その被虐待児のなかのおおよそ2割の子どもに知的障がいや発達障がいがあるという。施設職員たちは、子どもたちの養育で疲弊し、現場は混乱しているという報告がある⁽¹⁴⁾。

保育士の語りから「苦しかったこと」をあげる。

一番苦しかったのは、性的虐待を受けた子たちからの告白であつたり、おうちで受けてきた子の話であつたりで、寮の中でもあつたこともあつたんです。それを聞いたときが…。そうですね。それが一番苦しかったです。この子を守れなかったというので。それ（加害者）は卒園した子だったので、過去の話だったので…。そのころ心理士もいたので、一応寮の職員とこの心理士に話をし、それからちょっとカウンセリングっていうかたちでもつてもつことができたので、少し精神的に軽くは…。その子は、どうにか今結婚して子どももいて、ちゃんとした生活を送っているの、少し安心です。

同じような性的虐待で、家庭にいたときに兄からの虐待の問題で来たんですけど、結局お兄ちゃんが責められるのではなくて、その子が家族に責められるような…。自分がいなければいい、自分がその原因というか理由を作ってしまった、というように自己否定がすごい強い子でした。やっぱり話をするのも時間がかかったんですけど、中学2年で卒業後どうするかっていう話をしないといけないというときに、両親に会って話を決めてほしいということで一緒に家に行ったんですけど。そのときに本当にこの子の、何て言うのかな。一生懸命さと、会ったら何か言われて傷つくかもしれないという恐怖感とか、いろんな気持ちが…。（家族が）受け入れてくれるかもしれないという期待感とか、そういうのをすごい一緒に感じながら行った覚えがあるんですけど…。そのときに両親が受け入れてくれて、うまくいったのでよかったんですけど。すごい一緒に大変な、つらい思いをしました。かなり時間もかかったんですけど…。（Dさん）

5. 「印象的な出来事」と「苦しかったこと」

保育士たちが「印象的な出来事」として語ったのは、まず、施設を飛び出した子どもの捜索や被虐待児との関わりといった「子どもへの対応、養護実践（処遇上）の悩みや困難」であった。つぎに、卒園させた子の自

死や事故死などで先に旅立った「子どもの不幸」といった問題がある。さらに、先輩の優れた指導や仲間との団結といった「養護実践の学びや喜び」であった。

そして、「苦しかったこと」に対する回答も、ひとつは、1970年代後半の校内暴力、シンナー、売春への対応や発達障がいの子どもの、やんちゃ坊主の暴言といった激烈な子どもと関わる難しさ、つまり「養護実践（処遇）上の困難」であった。つぎに、中卒後本土就職する子、家族みんなが精神障害だった子（本児も発症）、性虐待を受けた子、帰省できない子、事故や自死で亡くなった子という厳しく深刻な状況にある子どもを思い、不条理に対して自らの無力感を感じている保育士たちの「共苦」の経験が語られた⁽¹⁵⁾。三つめは、厳しい労働条件から疲労困憊して退職した同僚のことや、現場で子どもと直接関わる自分たちと役所の事務職との感覚の違いであった。それらは、「職業倫理や職業に対する誇り」の問題でもあり、苦手な子どもとの関わりや被虐待児への対応など「自身の能力や専門性」に対する問いかけでもあったといえる。

参考までに保育所保育士が感じる困難をあげると、①保護者や同僚とのコミュニケーションや人間関係、②能力・専門性不足、③過重労働や社会的評価・待遇の問題、④業務拡大や保護者の要求の高まりの4点が主たるものであった⁽¹⁶⁾。保育所保育士と比べてみると、「能力・専門性不足」は同じだが、それ以外は異なる。施設保育士が担当する子どもたちが持つ激烈な行為—それらは、非行であり、暴力であり、自己否定であった—それらの多くは、子どもたちの家庭環境、親や社会からの疎外が生み出したものである。長い養護実践の過程においては、間違いや、きれいごとではすまないような子どもとの葛藤もあっただろうが、それらを差し引いても、彼女らの養護実践の根底にあるのは、不遇な子どもに対する共苦の感情と、彼ら／彼女らの生に対する慈しみではないだろうか。

保育士たちが大切にしたい価値は、他者理解と他者との関係性である。つまり、彼女たちのアイデンティティは、何かを成し遂げたり（能力）、どこかの一員であること（所属）にはなく、ひととの関わり（関係）すなわち相互行為のなかにあった。

語りのなかには楽しかったことも語られており、子どもたちの成長を助ける幸せや、先輩・同僚との協働による喜びが含まれていた。しかし、紙幅も尽きた。これらは、別の機会に論じたい。

謝辞

調査協力者のプライバシー保護のためお名前を記す

ことができませんが、長時間かつ個人的な事柄にまでふみこんだ調査にご協力くださった9人の皆様に心よりお礼申し上げます。また、本調査は、筆者と松本なるみ准教授（東京家政大学）の2人で実施しましたが、本論文執筆にあたってデータの単独使用を快諾してくれた松本氏に感謝します。

注

- (1) 子どもたちが自らの言葉で自身の心情や家族のこと、施設生活について綴ったり語った出版物としては『作文集 泣くものか』や『子どもが語る施設の暮らし』などがある。[全国社会福祉協議会養護施設協議会 1977；『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会編 1999] また、『児童養護』では第34巻（2003年度）で、「子どもが語る『自分史』」を特集している。
- (2) たとえば、『児童養護』では、第26巻（1995年度）で「養護施設の専門性」を特集し、職員に求められる専門性等の議論が行われている。職員のメンタルヘルス（第39巻第2号）なども時折特集が組まれている。
- (3) 2009年の元施設保育士への調査は、「人間文化研究所・学内プロジェクト研究推進費」の助成を受けておこなわれた。その成果は、[岩崎・松本 2011] に詳しい。
- (4) [岩崎・松本 2009] のポスターおよび配布レジュメ
- (5) 沖縄県内におけるクリスチアンの割合が2.82%と他県と比べて高率（日本の平均値の約3倍）であり、それは米軍の軍事占領がもたらした結果であるといわれる [一色 2008：211-213]。かつて筆者が参加した沖縄県の里親調査でも、里親たちにキリスト教の信仰を持つひとりが一定数みられ、かつ里親になった動機にも信仰が影響していることが語られた [社会的養護研究会 1993]。社会福祉とキリスト教的な価値観の関連は、いくつかの研究からも指摘されている。
- (6) 沖縄県における児童・養護問題を理解するための資料としたのは、児童相談所から毎年刊行される『業務概要』である。1970年から2010年までのおよそ10年ごとの特徴を把握するために、1970年代を第1期、1980年代を第2期、1990年代を第3期、2000年代を第4期、2010年を第5期（現在）と区切り、第1期は本土復帰後に初めて刊行された『昭和47年度』版（1973年刊行、以下同じ）を、第2期は『昭和55年

- 度』版(1981年)、第3期は『平成2年度』版(1990年)、第4期は『平成12年度』版(2000年)、第5期(現在)は『平成22年度』版(2010年)をそれぞれ参照した。
- (7) [山内 2010 : 109]
- (8) [沖縄県中央児童相談所 1985 : 97]。しかし、復帰後に経済事情が悪化したのは、海洋博などの影響というよりも、復帰前(1960年代)の人口移動と経済成長がストップしたこと、つまり近代化のプロセスの結果だったという議論もある [岸 2013 : 55-65]。
- (9) 児童養護施設退所者への調査が明らかにしたのは、彼らが施設退所後に困ったことは「孤独感、孤立感」だったということである [東京都福祉保健局 2011 : 16]。施設退園後にたったひとりで社会に放り出される10代の子の心情を想像してみると、保育士の語りが胸に突き刺さる。当事者の声としては、たとえば [市川 2006] がある。
- (10) [沖縄県中央児童相談所 1985 : 152]
- (11) [沖縄県中央児童相談所 1981 : 22]
- (12) 沖縄県の完全失業率は、1990年には3.9%であったが、翌1991年から上昇しはじめ、1998年には7.7%と前年度を1.7ポイント上回った [沖縄県企画部統計課 2013]。
- (13) ネグレクトが多い理由として、山内は沖縄県の離婚率の高さ(全国1位)をあげている。元配偶者の生活力のなさや借金という経済的問題が離婚を招き、経済的に困窮した離婚後の女性が観光産業に従事することによって、夜間の留守家庭では子どもだけで過ごすことになるというのである [山内 2010 : 112-113]。
- (14) [花城 2010 : 150]
- (15) 「共苦」(compassion)とは、相手の苦悩を想像し、共感し、その苦しみを感ずる力のことである。[Forges 1977 = 2000]
- (16) [岩崎 2010 : 194]
- 者のライフヒストリーからの考察』『日本乳幼児教育学会第20回研究発表論文集』
- 岩崎美智子・松本なるみ(2009)「女性たちの職業選択—元保育者の語りから—」日本保育学会第62回大会発表ポスター発表、2009年5月17日
- 岩崎美智子・松本なるみ(2011)「戦後沖縄における養護児童の生活と保母たちの養護実践—資料と語りからの考察」『東京家政大学人間文化研究所紀要』第5集
- 沖縄県企画部統計課(2013)沖縄県統計資料WEBサイト <http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/> [2013-10-6]
- 沖縄県児童相談所(1973)『児童相談所業務概要と分析 昭和47年度』
- 沖縄県中央児童相談所・沖縄県精神薄弱者更生相談所(1981)『業務概要 昭和55年度』
- 沖縄県中央児童相談所・沖縄県コザ児童相談所・沖縄県精神薄弱者更生相談所(1990)『平成2年度 業務概要』
- 沖縄県中央児童相談所・沖縄県コザ児童相談所・沖縄県知的障害者更生相談所(2000)『平成12年度 事業概要』
- 沖縄県福祉保健部青少年児童家庭課・沖縄県中央児童相談所・沖縄県コザ児童相談所(2010)『平成22年度版 児童相談所業務内容』
- 沖縄県中央児童相談所(1985)『児童相談所30年の歩み』
- 『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会編(1999)『子どもが語る施設の暮らし』明石書店
- 岸政彦(2013)『同化と他者化—戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版
- 社会的養護研究会編(1993)『沖縄の里親家庭に関する実証的研究』平成3・4年度科学研究費補助金(総合A)研究成果報告書(研究課題番号03301026 研究代表者 畠中宗一)
- 全国社会福祉協議会養護施設協議会(1977)『作文集 泣くものか』垂紀書房
- 東京都福祉局(2011)『東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書』
- 中村政則・森武磨編(2012)『年表 昭和・平成史 1926-2011』岩波書店
- 野本三吉(2010)『沖縄・戦後子ども生活史』現代書館
- 花城安夫(2010)「第4章 第4節 養護施設の現状と課題」『沖縄子ども白書』編集委員会編『沖縄子ども白書—地域と子どもの「いま」を考える』ボーダーインク

文献

- 市川太郎(2006)「第12章 当事者から見た日本の社会的養護」望月彰編著『シードブック子どもの社会的養護—出会いと希望のかけはし—』建帛社
- 一色哲(2008)「軍事占領下における軍隊と宗教—沖縄地域社会とキリスト教を事例に—」『甲子園大学紀要』第36号
- 岩崎美智子(2010)「保育者の挫折と困難—元保育

Forges, Jean-François, 1997, *Éduquer contre Auschwitz—histoire et mémoire* (= 2000、高橋武智訳『21世紀の子どもたちに、アウシュヴィッツをいかに教えるか?』作品社)

山内優子 (2010) 「第3章 第1節 誰がこの子らを救うのか?—児童相談所からみた子どもの貧困—」『沖縄子ども白書』編集委員会編『沖縄

子ども白書—地域と子どもの「いま」を考える』ポーターインク

本研究は、科学研究費補助金の助成を受けておこなわれた。(基盤研究(C)「戦後沖縄における保育者の関係アイデンティティに関する研究」課題番号23531084 研究代表者 岩崎美智子)